

晩鐘

(1) 道

たくさんの道があると思っていた。

嗚呼 神さえも 若かったのだと知る。

どの道も行き止りだった。

そして今 最期の道を歩き始めた。

この道しかないから 人々は仕方なく この道を行く。

けれど誰も皆 足取りが重い。

この道が行きつくところは 大方の見当が 付いているのだ。

行きたくなくても この道しかないのだ。

やがて この道は急勾配の下りになる。

誰もが抵抗出来ずに速足になる。

一人が転べば 皆は薙倒され 怒濤のごとくに 瞬時に その道を すべり落ちて行く。

すべての人が一塊になって。

遠く悲鳴が 雷鳴の様な轟きを残して……

一陣の風が去り

静寂が 戻る。

(2) 愛

未来のない処に 愛は生まれない。

愛は過ぎた時代の 滑稽なモラル。

人々の心は不毛になり 傷つかない為にだけ努力する。

希望と愛とは 同じ巢の中に棲んでいる。

その巢の中で 孵らない冷えた卵が泣きじゃくっている。

人々は 実に巧妙な演技派に化し 希望や愛には価値等ないと思い込み、そんな物は

ない方が気楽だと豪語する。

パートナーは ゲームの中

子供は邪魔者で、振り向けば自分に影さえない。

リセットボタンを押すのは面倒だ。

オフボタンに手をかけるのも カッターい。

人生のスイッチが「ON」になっているのは解り切っているのに 目を向けるのを怖がっている。愛を詰った罰なのだ。

(3) それから

かつて 運命としか言い様のない出来事は突然に訪れた。

忍び足で 背後から ふいに襲いかかつて来る「もうりょう」達

しかし 今、運命は創られた高処から、四肢の鎖を引きちぎり、その音高く鳴り響かせて やって来る

僕等は もう逃げられない。

変える事も出来ない。

人々は 行き場を失って地に伏す。

見離され 荒れ果てた大地に。

しかし これこそが 僕等の望んだものであったのだと 誰もが薄々気付いている。

大地に突き刺さった軍用機の溶けた残骸は

政治家達の虚しい野望

そこ ここに散乱している筈の人間の死体さえ キラキラした大気に溶けて 姿さえない。

僕等が かつて見た事もない世界。

しかし それは 誰もが容易に想像出来た世界。一体 地面に ひれ伏して 涙して 誰に詫びると言うのか。

……もう 誰も いない。……

……もう 何も ない。……

灼熱の赤い地平線に 太陽だけが変わらずに 赤々と大きくゆらめいている。

僕に 僕は一人きりだと確信しろと言うのか。誰かを捜して歩き出せと言うのか。

一体どこまで？ 一体何の為に？

何人かのフィメールに出会えたとしても、そこに健全な卵子はないのだ。

人類は クローンにさえ、もう なれない。

男も女も 無意味な影法師。

気の遠くなる様な時間さえ 宇宙にとっては何でもない。

時間は努力もなく過ぎ 地球は宇宙の片隅で奇妙な再生を遂げて行く。

放射能とダイオキシンの満たされた新しい世界へと。そこには 新しい生命が息づく。
未来は 展回の様相をみせて こともなげに動き出す。

僕等は 一体 何を嘆いていたのだろう。
僕には不気味としか見えない新しい世界。

しかし僕等が望んでいたものは これだったのかも知れないと思える世界。

文明を封じ込め、文明の機能しない世界。

愛とか喜びとか平和とか幸福とか言う摩訶不思議な現象を知らない世界

搾取し合う事を共存と呼ぶ様な ゆがんだ常識さえまかり通る 細胞単位の死闘の世界。

やがて間違いなく細胞同士が寄り集まり 大きな生命体を作り出して行くだろう。

僕は歩き出す 全身を焼かれても転り続けている君に 敬意を払いながら。

神の あざけり を背に……